

# 空きコマでの「スマホ・リテラシー」 —大学生の二者間会話場面分析を通して—

## Interaction analysis of literacy observed from two university students' usage of smartphones between class periods

千田 真緒<sup>†</sup>, 岡部 大介<sup>‡</sup>, 市野 順子<sup>‡</sup>

Mao Chida, Daisuke Okabe, Junko Ichino

<sup>†</sup> 東京都市大学大学院環境情報学研究科, <sup>‡</sup> 東京都市大学メディア情報学部

Graduate School of Environmental Informatics, Tokyo City University

Faculty of Informatics, Tokyo City University

g2183119@tcu.ac.jp

### 概要

大学生がどのようにメディア(特にスマートフォン)とともに日常会話空間をつくりあげているのかを考察した。その結果、大学生の日常会話空間のひとつである「空きコマ」における2者間の会話が、小刻みなスマートフォン(以下、スマホ)の利用を通して「調整」されていることが見いだされた。そこには、大学生たちも知らず知らずのうちに身につけてきた、いわば「小さなリテラシー」とでも呼ぶべきものが働いていることが観察された。

キーワード: 大学生, スマートフォン, リテラシー, 日常会話, 相互行為

### 1. 研究背景と目的

#### 1.1 スマホ利用にみる小さなメディア・リテラシー

メディア・リテラシーということばは、どのようにすればメディアをとらえる枠組みを身につけることができるか、という教育的な文脈で語られることが多い(細馬, 2018)。例えば、フェイクニュース、フィルターバブル、Qアノンといった近年の用語に象徴される、今日的なメディア体験や情報を読み解く能力が挙げられるだろう。確かに、このようなメディア・リテラシー教育は今日の社会において重要に違いない。国内外問わず、多くの若者がリテラシーを欠くままにソーシャルメディアを使用し、事件に巻き込まれ、社会問題となっており(叶・歳・堀田, 2016)、若者たちがメディア・リテラシーを身に付けなくてはならないことが指摘されてきた(例えば、boyd, 2014 野中モモ訳 2014 など)。

ただし、細馬(2018)や好井(2017)が指摘するように、私たちのメディア体験は、教育によって身につくリテラシーだけで成り立っているわけではない。例えばLINEを介したコミュニケーションにおいて、相手の世代やその関係性によってメッセージの内容や長さは異なる。やり取りする相手によって、絵文字やスタンプの有無を意識的に変えたり、メッセージを区切る部分を変えたりすることもまた、メディア・リテラシーと言えるだろう。さら

には、半ば無意識にスマホを操作することも、日常会話場面の時間の流れを構成する。

本研究で着目するメディア・リテラシーは、大学生の空きコマの何気ない会話を構成している「モノとしてのスマホ利用にかかわるリテラシー」である。例えば2者間会話場面においては、スマホに届く何らかの通知や着信は、会話の中断や再開を誘うことを予見させる。そのようなことがなくとも、何気なくスマホをいじるなど、一見2者間会話に関係のないように見える瑣末な行為が、会話の時間を形作ることがある。本稿が着目する行為は、一見無意味なスマホの縦スクロールやカバーの開閉といった、いかにもフィールドからとりこぼされそうなことである。しかしこれら諸行為が、大学生どうしの空きコマ「らしい」円滑なコミュニケーションを下支えしていることを例証する。対象とするメディア・リテラシーは、大学生本人たちも知らず知らずのうちに身につけてきた、いわば「小さなリテラシー」と呼ぶべきものかもしれない。こうした一見無用の用とも見えるスマホ利用のリテラシーを議論の俎上にあげることが、会話における人工物の意味を捉え直すきっかけともなるだろう。

#### 1.2 空きコマコミュニケーションを下支えするスマホ

平本・山内(2017)は、イタリアンレストランにおける注文場面の質的分析を通して、客がとるわずかな身体動作を、「注文を決める活動からの離脱を示す要素の配置」として店員が利用していることを示している。平本ら(2017)の挙げる「要素の配置」には、メニュー表をたたむ、姿勢を変化させる、厨房を見ろといった行為とともに、「携帯電話をいじる」という行為が含まれている。イタリアンレストランの注文場面において、「携帯電話をいじる」ということは、店員にとって、客の活動の転換を可視化してくれるリソースとなる(ただし平本ら(2017)は、客による要素の配置には、客の「意図性の曖昧さ」が含まれることも指摘している)。

飲食店の接客において、店員は客による要素の配置を利用する。意図的かもしれないし、無意図的であるかもしれないが、客側もまた「携帯電話をいじる」という要素の配置を通して注文における円滑なコミュニケーションを構成することになる。本稿の関心に則れば、あるタイミングで携帯電話やスマホをいじったりする行為、そしてその行為への反応は、注文というコンテキストを構成する、モノとしてのスマホ利用にかかわる小さなリテラシーと言える。

このように、人工物やメディアは、コミュニケーション相手の意思を察知するリソースとなっている(坂井田・諏訪(2015))。3人の学生が協同でもんじゃ焼きを作る場面を分析した坂井田ら(2015)によれば、参加者たちは、油のボトルやヘラという人工物に手を伸ばしたり置いたりすることを利用しながら「互いの意思を察知」し、例えば「土手を作る」ための教示を伝えるという「暗黙的協同」を行っていた。

もんじゃ焼きの調理場面という明確な目的を伴う場面ではないものの、一見なにごともなく進行しているように見える空きコマ場面においても、スマホという人工物／メディア利用から相手の意思を察知し合っていることが推測される。諏訪(2013)に倣えば、わたしたちは、あらかじめ準備された対応だけをこなすのではなく、日常生活世界のなかで動的に対応する知が求められる。(飲み物や書籍やノートのみならず、)スマホというメディアを巧みに用いる、また、他者の行為に当意即妙に対応する大学生を中心とした若者特有リテラシーによって、何気なく過ごす空きコマ「らしい」会話空間は維持されることが推測できる。

また阿部ら(2018)は、大学生相当の3者間会話場面の分析を通して、飲み物を飲む行為が、発話権を調整するリソースになっていることを示している。特に、ペットボトルの飲み物を飲むときは、飲み物を口に含むまでに、蓋を開けるという作業が発生する。その作業が、進行中の会話やその場面で起こっている相互行為を「観察する時間」を与えている。本稿においても、空きコマでなされる会話のなかで、(カップに入っている)飲み物を飲んだりスマホをいじったりする行為が多くみられた。ペットボトルの蓋を開けるという明示的な行為同様、本研究で扱うスマホのカバーケースを閉じるという行為もまた、参加者にとって2者間会話を「観察する時間」となっている可能性がある。

これと同様に、大学のカフェテリアで観察される大学生の空きコマにおいても、大学生どうしによる意図性が曖昧な諸行為とそれへの反応を通して「空きコマというコンテキスト」が織り成される。その際、特に大学生にお

いては、スマホというメディアの微細な扱い方の変化によって、会話が中断、フェードアウトされたり、または再開されたりする。カフェテリアで過ごす空きコマにおけるスマホは、会話の時間を形作るメディアである(本研究でデータとして取得された17組の大学生のうち、全ての大学生(34名)において、カフェテリアのテーブルの上に自身のスマホを置く時間が観察された)。

### 1.3 曖昧な目的の場としての「空きコマ」

本研究のフィールドである、カフェテリアにおける空きコマは、大学生にとって、次の講義の準備をしたり、飲食したりする時間として利用されることもある。しかし、勉強や食事など明確な目的とともに過ごすだけではない。本研究においては、勉強や食事などの明確な目的を伴わず、知人との他愛もない会話が繰り返される事例が観察された(観察対象とした17組のうち3組は主たる活動が勉強、6組は食事、1組は睡眠であった。残り7組の主たる活動は、会話であることが確認された)。本稿で取り扱うデータは、阿部ら(2018)が分析する「雑談」(その時間に話し合うテーマは特に決まっておらず、参加者どうしのやりとりによって、話題が少しずつ変化していく状況)という場面と類似している。大学生にとっての空きコマもまた、「目的を曖昧にしたまま」過ごすことが、参加者どうし暗黙に共有されている時間と推測される。

### 1.4 本研究の目的

このような背景のもと、本稿では、大学のカフェテリアで過ごす空きコマという「曖昧な目的が共有されている場面」において、飲食物との関係だけを取り出すのではなく、スマホとの(一見取るに足らない)インタラクションにも着目し、それらがいかに空きコマの2者間会話を形作っていくかを分析する。そして、空きコマの時間が、スマホというメディアとの小刻みなインタラクションによって、中断と再開を繰り返しながらも継続する様子、およびそれが互いの「意思」を察知するリソースとなっていることを例証する。

## 2. 方法

### 2.1 データ収集

2016年6月から7月までの1ヶ月間、香川大学内にあるカフェテリアにて本稿のデータが撮影された。座席の真上からカメラで撮影し、テーブルの上にマイクを設置した(図1)。香川大学の工学部倫理委員会の承認を経てデータ収集がなされた。観察対象となった大学生には、調査

の目的を説明し、協力が可能な場合は謝礼が支払われた。その結果、合計17組(34名)のデータが得られた。

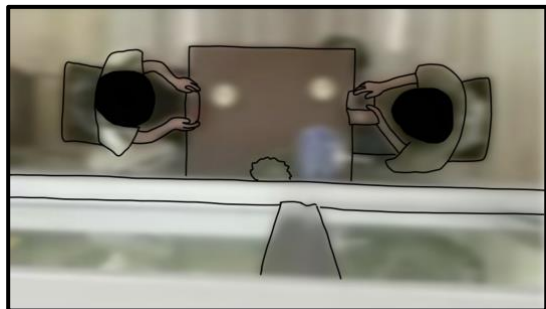


図1 撮影の人物・環境配置

撮影された17本のデータのうち、音声聞き取りにくいものや、睡眠または勉強時間が長く、行為に変化が見られないものを除いた7本のデータを分析対象とした。分析対象とした映像は、最も短いもので15分11秒、最も長いもので33分27秒である。いずれも大学生2名の会話場面であり、女性どうし6組、男性どうし1組からなる。

## 2.2 分析の手続き

7本の映像を対象に、映像分析ソフト ELAN(EUDICO Linguistic Annotator)を用いて、映像に注釈をつけた。まず、2名それぞれの「発話内容」を発話がなされた時間軸上に書き出した。その上で、空きコマで観察される何気ない日常会話とスマホ利用について分析するために、「スマホに関連する行為」が確認された箇所に注釈をつけた。「スマホに関連する行為」は、主にスマホを操作している状態のことを指す。スマホを机に置いたり、保持していたりする行為も含む。

加えて、「荷物を置く」、「椅子に座る」、「飲む」、「食べる」、「席を離れる」などといった「スマホに関連する行為」以外の行為に関しても、注釈層に書き込んだ。7組全てにおいて同様の手続きをとった。

## 3. 結果と考察

### 3.1 大学のカフェテリアにおける空きコマの過ごし方の概要

#### 3.1.1 座席において見られる諸行為と出現回数

大学のカフェテリアにおける2者間会話場面を理解するために、7組において観察された回数の多かった「飲む」行為、「スマホ操作」、「食べる」行為、「席を離れる」行為の4つの行為の出現回数を確認した。なお「席を離れる」行為

は、カフェテリアで注文した飲み物や食べ物を取りに行ったり、観察対象者以外の友人と話したりするために席を外すことを指している。

それぞれの行為が7組の映像データにおいて観察された回数をカウントした。その結果、「飲む」行為が1組あたり平均25.93回と最も多く、次いで「スマホ操作」が24.71回だった。また、「食べる」行為が5.07回、「席を離れる」行為が1.79回であった。

観察された「スマホ操作」に関連して、1人当たりの1分間あたりのスマホの操作回数は、平均で約1.13回、同様に飲む行為は平均約1.22回観察された。大学生は空きコマのカフェテリア利用時に、「飲む」行為と同程度「スマホ操作」をすることが示された。カフェテリアにおける2者の会話場面においては、飲み物、スマホといった人工物との関係をお互いに示しあいながら会話を構成していることが分かる。

#### 3.1.2 カフェテリアでのスマホ操作時の行為形態

上記3.1.1を通して、大学のカフェテリアにおいて、小刻みなスマホ利用とともに空きコマの会話がなされていることが確認された。ここでは、2人のうちどちらか一方がスマホを利用し始めた際、そのスマホ操作の時間中、もうひとりの対象者がどのような行為をしているのか確認した。

「スマホ利用」を開始した対象者のスマホ画面を共同注視するような形態が観察されれば、その場面は、スマホというメディアを介して会話が展開していることが予測される。そうではなく、一方が「スマホ操作」を開始した際に、もうひとりの対象者も自分自身のスマホを操作し始めた場合、その場面は、お互いが自分のスマホを眺めながら会話をする時間、または沈黙の時間となることが予測される。さらに、一方が「スマホ操作」を開始した際に、もうひとりの対象者が、例えば飲み物に手をのぼしたり、カバンから何かを取り出したりと「スマホ操作」以外の行為形態をとった場合も同様に、会話の継続または沈黙の時間となることが予測される。

そこで、細馬(2014)を参照し、2者のうち片方が「スマホ操作」の行為をなした際、もう片方も(a)「スマホ操作」の行為を開始した学生のスマホを2者で共有する(行為共有)、もう片方も(b)「スマホ操作」の行為をする(行為一致)のか、はたまた(c)「スマホ操作」の行為以外をする(行為不一致)のかに着目し分類した。以上3つの行為形態を以下にまとめる。

- (a) 行為共有：同じスマホの画面を2人で共有する。
- (b) 行為一致：それぞれのスマホを操作する。
- (c) 行為不一致：飲む、食べる、立ち上がるなどスマホ操

作以外の行為をしている。

7組のデータに関して、各形態の頻度は表1の通りである。片方の参加者がスマホの操作をした際、2/3以上(69.23%)において、もう片方は違う行為をする(c)「行為不一致」が観察された。一方で(a)「行為共有」の出現回数は少ない(4.61%)。このことから、空きコマのような「目的を曖昧にしたまま」2者会話が進行する場面において、どちらかが「スマホ操作」の行為を開始した際、もう片方は相手のスマホ利用に積極的に関与しない場合が多いことが分かる。

表1 一方の対象者によってスマホ操作が行われた際  
のもう一方の対象者の行為形態

行為形態	頻度(回)
別行為	90
同行為	34
共有	6
合計	130

ここまで、大学のカフェテリアにおける2者間会話場面において観察される諸行為の概要と、特にスマホというメディア利用がなされた時の状況について確認してきた。大学生は、お互い細切れにスマホに触れたり視線を送ったりする。こうしたメディア利用が具体的にどのような行われ、またどのように応答されるのかについて捉えていくために、特徴的な場面を取り上げて質的に分析していく。

### 3.2 何気ないスマホ利用場面の質的分析

空きコマのような「目的を曖昧にしたまま」2者会話が進行する場面は、行為者である大学生が発話するタイミングや、スマホをいじるタイミングなどは、あらかじめ決まっていない。上野・西阪(2000)は、いつ、ある行為が実行されるのかということが、行為に先立って存在するものではなく、実際の行為の中で特定されていくことを示している。続く2つの事例では、2者間会話に一見関係のないように見える瑣末な「スマホ操作」の行為が、いかに「何気なく過ごす空きコマの会話空間」の時間を形作るかを質的に検討する。

#### 3.2.1 「無意味なスクロール」からみえる「スマホ・リテラシー」

まず事例1において、意図的とも無意図的ともとれる

「スマホのスクロール」を終えるとともに発話を開始する場面」を見ていく。事例1の場面は次の通りである(なお坂井田(2020)にならない、事例1の身体的ふるまいを書き起こしている(図2)。「右-身体」は、図2におけるBの身体的ふるまいを示している。また、Aが発話している際、どの位置で身体的ふるまいが始まったかを、┌の記号で表している)。

[事例1] 事例1の直前まで、両者とも発話をしない沈黙の時間が約40秒間続いていた。その沈黙の間、Aは「スマホ操作」の行為と「飲む」行為、Bは「飲む」行為をしていた。その後、Aは「ふわふわのかき氷もさ、」と発話すると同時にスマホの操作をやめた(図3-(a))。そしてスマホを操作していた左手を飲み物に移行させた。その際、右手では、飲み物を机に置いていた(図3-(b))。その後、両手を飲み物に移した(図3-(c))。

図3-(a)の直前の、Aがスマホを操作している指の動きに着目する。Aは「ふわふわのかき氷もさ、」と発話する直前、スマホでInstagramのアプリケーションを表示し、それを縦に数回スクロールしていた(調査者には、画面上のテキストや画像を判読、視認可能な速度を超えて、「無意味にスクロールしている」ように見えた)。そしてスクロールをやめると同時に発話し始めた。一方Bは、Aがスクロールをしている間、飲み物を飲んでいた。Aが「ふわふわのかき氷もさ、」と会話を再開した際に、BはAの発話を承認するかのように、飲み物を飲むことをやめ、Aに顔を向けていた。その後、両者とも会話をしながらも飲み物を飲む行為は続けていた。

B-身体 ┌ 飲むのをやめ、顔を上げる (図3-(a))  
A ふわふわのかき氷もさ、 (図3-(b))  
A-身体 ┌ スマホから指を離し終える (図3-(c))

図2 事例1の身体的ふるまいの書き起こし

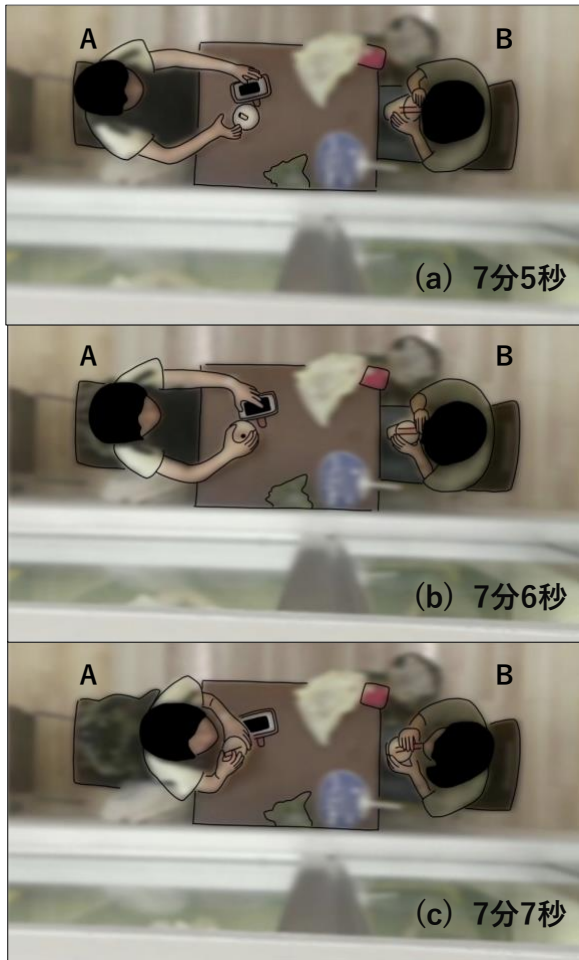


図3 事例1の身体的ふるまいの変遷

3.2.2 「パン買ってくる」からみえる「スマホ・リテラシー」

次に事例2として、Aによる「スマホカバーを閉じる」という何気ない行為に誘われる形で、Bが離席する場面を見ていく。Aのスマホカバーを閉じる行為が沈黙を破り、会話を再開させる合図となり、それを目にしたBが、会話の再開の前に別の行為を開始する意思を告げた場面である。

[事例2] 図5では、まず、Aは頭部(視線)を左に逸らしながら、自身のスマホカバーケースを閉じ始めた(図5-(a))。Aがカバーを完全に閉じた際、Bはスマホのケースからカードを取り出そうとし(図5-(b))、約2秒後に(Bは)「パン買ってくる」と発話し、カードを取り出した(図5-(c))。Aは、このBの発話とオーバーラップする形で「うん」と発話し、Bの行為を承認した。

なお、図4のBの「パン買ってくる」の発話がなされた約2分前に、BからAに向けてカフェテリアのパンに関する話題が出されていた。その際、Bからのパンの話題に対してAが「そうなん？」というような対応

をしていたことが確認された。図4におけるAの「うん」という発話が、Bの発話とオーバーラップしていることから、図5の場面においてBが「パンを買いに行く」ことを予見していた可能性が高い。

A-身体	スマホカバーを閉じ始める (図5-(a))
A-身体	スマホカバーを閉じる (図5-(b))
B	└ (2秒後) ちょっとパン買ってくる (図5-(c))
A	└ うん

図4 事例の身体的ふるまいの書き起こし

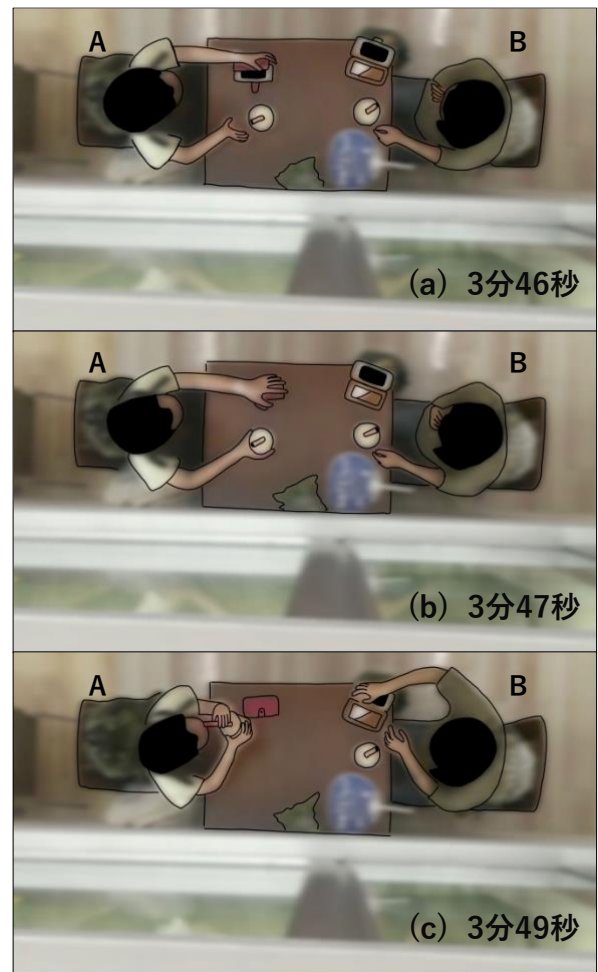


図5 事例の身体的ふるまいの変遷

事例1と2において、Bは、Aによる(意図的とも無意図的ともとれる)一見些細なスマホ利用に誘われるように、再開された会話に参加したり、立ち上がってパンを買いに行くという別の行為に移る契機として利用したりしていた。空きコマにおける2者会話は、なにがともなく円滑に進んでいるように見えるものの、より細かく見ていくと、そこには相手のスマホ利用に動的に対応する小さなメディア・リテラシーが観察可能となる。大学生たちは、

ゆるやかな空きコマの時間ではあるものの、お互いの些細な行為を用いながら、会話の中断や再開、行為の開始などを調整していたのである。

[11] 好井裕明 (2017). スマホのある日常, 「今, ここ」から考える社会学 (pp.72-97) 筑摩書房

#### 4. まとめ

本研究では、大学生の空きコマにおける質的な分析を通して、スマホを用いながらの会話空間づくりや、その際に活用されている日常生活に埋め込まれたメディア・リテラシーについて考察してきた。スマホを用いた互いの行為の察知と動的対応は、対象の大学生たちの中で、空きコマに代表されるゆるやかな対話空間を維持するためのリテラシーとして働いていた。何気ない2者間会話の断片の多くは、会話の相手のみならず、メディアとの相互行為を含んで調整され続けるものなのである。この「スマホ・リテラシー」とでも呼ぶべき大学生の諸行為は、当事者たちが日常生活世界で身につけてきた一見些末な身体所作であるものの、実は、彼ら彼女らのコミュニケーションの時間を形成しているのである。

#### 文献

- [1] 阿部・牧野・門田・山本・古山, (2018) “いつなら飲んでも良い? 雑談場面における“飲むこと”の相互行為的調整, 2018年度日本認知科学会第35回大会, Vol. 35, pp.685-694.
- [2] Boyd, D. (2014). *It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens*. New Haven: Yale University Press. (ボイド, D. 野中モモ(訳) (2014). つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの 草思社)
- [3] 細馬宏通, (2014) “相互行為としてのページめくり”, 認知科学, Vol. 21, No. 1, pp.113-124.
- [4] 細馬宏通, (2018) 映像を指し示す——やりとりのもたらすメディア理解, 世界思想社編集部 (監修), 世界思想 45号 2018春 (pp.91-96), 世界思想社.
- [5] 平本毅・山内裕, (2017) “サービスエンカウンターにおける店員の「気づき」の会話分析”, 質的心理学研究, Vol. 16, No.1, pp. 79-98.
- [6] 叶少瑜・歳森敦・堀田龍也, (2016) “大学生のメディア/ソーシャルメディア使用とネット・リテラシーとの因果関係, 及び社会的スキルと性別の効果”, 日本教育工学会論文誌, Vol. 40, No.3, pp.165-174.
- [7] 坂井田瑠衣(2020) 相手のふるまいに寄り添う——日常会話の間合い, 伝康晴・坂井田瑠衣・高梨克也・諏訪正樹(編), 「間合い」とは何か——二人称的身体論(pp.66-67), 春秋社
- [8] 坂井田瑠衣・諏訪正樹, (2015) “身体の観察可能性がもたらす協同調理場面の相互行為——「暗黙的協同」の組織化プロセス”, 認知科学, Vol. 22, No. 1, pp. 110-125.
- [9] 諏訪正樹, (2013) “見せて魅せる研究土壌——研究者が学びあうために”, 人工知能学会誌, Vol. 28, No.5, pp.695-701.
- [10] 上野直樹・西阪仰 (2000). インタラクシオン——人工知能と心 大修館書店